

天神山瓦窯周辺出土鷲尾の検討

1 はじめに

2018年2月、奈良県五條市在住の窪田照久氏より、翌年の古代瓦研究会が鷲尾をテーマとするにあたり、五條市今井町松原所在の天神山瓦窯で採取され、ご自身で保管されていた未公表の鷲尾を資料紹介に供してもよいという申し出を受けた。研究会事務局としてこの申し出をお受けして、鷲尾資料11点を2020年2月実施の古代瓦研究会で初公開資料として公開した。

その後、この鷲尾資料について所蔵者のご理解とご了解を得ることができ、奈良文化財研究所考古第3研究室においてMetashape pro版（Agisoft社）を用いて3次元計測し、ソフトCloudCompareを用いて復元作業および3次元モデルの作成をおこなった。その3次元モデルを基に図化作業をおこない、検討を加えた。その経緯と成果を本稿にて報告するものである。

2 天神山瓦窯と本鷲尾資料の採取の経緯

天神山瓦窯が位置する丘陵は吉野川の河岸段丘上のうちのひとつで天神山丘陵と呼ばれている。この丘陵上には大和地域においてかなり早い段階に須恵器生産が開始された今井窯・荒木神社裏窯などが展開し、飛鳥時代になるとその生産体制を基に瓦生産が開始された。周辺に目を転じれば、吉野川北岸には荒坂瓦窯、居伝瓜山瓦窯、南岸には牧代瓦窯などが点在し、主に飛鳥方面に瓦を供給していた一大瓦生産地、五條窯跡群が形成されたのである。その中でも奥山廃寺創建瓦である角端点珠の素弁蓮華文軒丸瓦や蓮華文鬼瓦を生産した天神山上方窯¹⁾がもっとも早く瓦の生産を始めた窯であった²⁾。戦後、天神山丘陵は果樹園として開削され、本稿で報告する鷲尾資料もそれにともなって掘り起こされたものだそうである。窪田氏によれば、昭和45年頃には桃畠に掘り起こされた鷲尾片が積み上げられており、地権者から耕作の邪魔であるからと譲り受けたものが今回報告する鷲尾資料であるという。戦中の高射砲基地建設のための造成や戦後の果樹園造成などによって天神山丘陵の開削が進み、多くの瓦や鷲尾が露頭していたと考えられる。

これらの鷲尾が出土した付近は奥山廃寺供給窯の天神山上方窯よりも約5m斜面を下った位置にあったという。7世紀前半の奥山廃寺創建瓦と本稿の鷲尾の間には時期的隔たりが認められることを勘案すれば、奥山廃寺供給窯より下方の丘陵斜面に別個の窯が存在したことが推定でき、これを天神山下方窯と仮称する。なお、現在は竹藪に覆われてしまい、窯の想定位置を視認することはできない。

(岩戸晶子)

3 観察所見

観察をおこなった資料の成果を図22、23に掲載する。図22-1は左側面縦帯～胴部。胴部が内側に巻き込むようにカーブし、縦帯も上方でやや屈曲している。胴部上方の屈曲部付近に相当する。胴部無段タイプ。図22-2は左側面縦帯部。珠文径や破片の厚みは1に近く、同じく屈曲部付近の破片とみられる。図22-3は右側面鰭部。粘土紐の剥離痕跡や鰭部の段の傾斜、腹部の接合痕跡からみて、屈曲部にあたる破片と判断できる。内側の正段は外側の正段と位置をずらして配置されている。図22-4は左側面鰭部～縦帯部。粘土紐剥離面の水平を優先すると、内外面の正段は鰭端部に向かってやや下降することになる。底部に近い部位か。図23-5は左側面縦帯部。縦帯内郭の珠文径が他に比べて小さく、内郭全体の幅も狭い。珠文帯上方に外郭の段帯がわずかに残存する。また、珠文中心のコンパスの針痕が明瞭に残っている。頂部付近の破片と判断した。図23-6は無段の胴部片。下方に向かって厚さを増しており、上方に残る突帶状の残存部は脊稜の痕跡とみられる。断面蒲鉾形の脊稜が想定できる。図23-7は胴部有段タイプの右側面胴部。前方に向かって段の彫りが浅くなってしまっており、後述するように、頭部に近い部位とみられる。図23-8は左側面胴部。縦帯内郭内側の突帶が残存する。胴部無段。内側にゆるやかにカーブしつつ、下方に厚みを減少させる。頂部に近い部位とみられる。図23-9は腹部片。鰭部との剥離痕跡があり、断面に粘土紐の積み重ね痕跡が認識できる。図23-10・11は小片のため詳細な部位は不明。粘土紐の剥離痕や厚み、調整の様相から、10は胴部片、11は腹部片になる可能性が高い。

いずれも幅3.0～5.0cm程度の粘土紐を積み重ねることで成形されており、外面調整は無段の胴部についてはナ

デ、その他施文部分はケズリで仕上げている。内面は基本的に粗いナデまたはケズリだが、胴部有段タイプの7は内面も丁寧なナデで仕上げている。

4 全形の復元

今回の資料と樞原考古学研究所附属博物館所蔵鷦尾（以下、樞考研鷦尾）³⁾の観察所見からその全形復元について再検討をおこなった。その過程で、従来復元図の修整点を確認したため、復元図を再構成した（図24）。以下、天神山瓦窯出土鷦尾の特徴を述べる。

胴 部 胴部無段タイプ（図22-1、図23-6・8）と胴部有段タイプ（図23-7）の2種類が存在する。後者は段幅約7.0～9.0cm程度の幅広の正段をもつ。前方ほど段の削り出しが浅く、半円形透かし付近で途切れるとみられる。同様の破片が樞考研鷦尾にも含まれている。

頭 部 本資料に頭部は含まれない。樞考研鷦尾では大棟を差し込む溝と台形の透かし穴が復元されている。

鰐 部 鰐部内外に正段をもつ。外側の正段は縦帯の段帯と筋を揃え、鰐端部まで一連で削り出す（図22-4）。内側の正段は外側の正段幅のほぼ中央にずらして配置される。内外ともに頂部に向かうほど段幅は狭くなるが、段幅7.0～9.0cm前後を基本とする（図22-3・4）。

縦 帯 外郭に段帯、内郭に珠文帯を配し、それぞれ1条の突帯で区画する。突帯幅は1.4～1.5cmで差はないが、断面台形状のものと蒲鉾形状のものの2種類を樞考研鷦尾で確認した。今回の資料は多くが断面台形だが、図23-5は前者に該当するか。外郭の段帯は「山形と曲面をなす谷形」が交互すると報告されているが⁴⁾、山形は稜線がなだらかで、谷形相当の段はほぼ平坦である。段幅はいずれも約5.5～7.0cmで、頂部ほど狭い。珠文帯は直径4.2cmの珠文を密接するように削り出している。

腹 部 胴部・鰐部と腹部を別々に成形し、接合する「腹部接合式」の手法をとる（図23-9）⁵⁾。樞考研資料では腹部底中央に半円形透かしが存在する。

頂 部 明確に頂部に該当する破片はない。樞考研資料では鰐部が頂部先端まで続くが、今回の復元図では途中でとぎれる形式を想定した。また、樞考研鷦尾には頂部付近の胴部に円形透かしがある。

5 天神山瓦窯出土鷦尾の位置づけ

天神山瓦窯出土鷦尾は複帯構成の縦帯などいわゆる「唐様式」鷦尾の要素をもつ。特に、縦帯外郭の段帯が山段と平坦段（谷段）を交互に配置する構成は、明瞭な山谷段を含む縦帯をもつ明日香村ドウジョウ遺跡例や同川原寺例に近い⁶⁾。唐様式鷦尾の段帯はその後、同橋寺例や大阪府鳥坂寺例のように単純な正段や逆段に簡略化され、最終的には明日香村坂田寺E類や奈良市唐招提寺例のように完全に省略される⁷⁾。天神山瓦窯の鷦尾はまさに、その中間的様相として位置づけられる。また、一般的な唐様式鷦尾が縦帯外郭に珠文帯、内郭に段帯を配置するのに対し、天神山瓦窯出土鷦尾は段帯を外郭に配置しており、縦帯の段と鰐部の段が直線的に削り出されている。

一方、胴部有段の個体が存在することが今回の再検討であきらかとなった。唐様式鷦尾の多くは胴部無段であり、天神山瓦窯例はドウジョウ遺跡例と同様、飛鳥時代前半期の古い要素を一部残すものといえる。

その製作年代について、表採資料のため、共伴遺物がなく、直接的な年代を指摘することはできないが、複帯構成を保つつつ、段帯を簡略化している鳥坂寺例が7世紀末～8世紀初頭頃の資料に想定されていることを踏まえると⁸⁾、天神山瓦窯例はやや古相に位置づけられる。それ以前の7世紀後葉～末頃としておくのが妥当であろうか。今後、川原寺例や兵庫県猪名寺廃寺例などを含めた初期の唐様式鷦尾との比較検討を引き続き進めていく必要がある。

（道上祥武）

謝辞

最後になりましたが、資料提供ならびに資料の調査・成果公表にご理解・ご協力いただいた畠田照久氏に心より感謝申し上げます。また、3次元計測および3次元モデル作成は、奈良大学大学院生の松島隆介氏が担当し、隨時、遺跡・調査技術研究室関係各位の協力を得ました。あわせてお礼を申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費19H01355の成果を含みます。

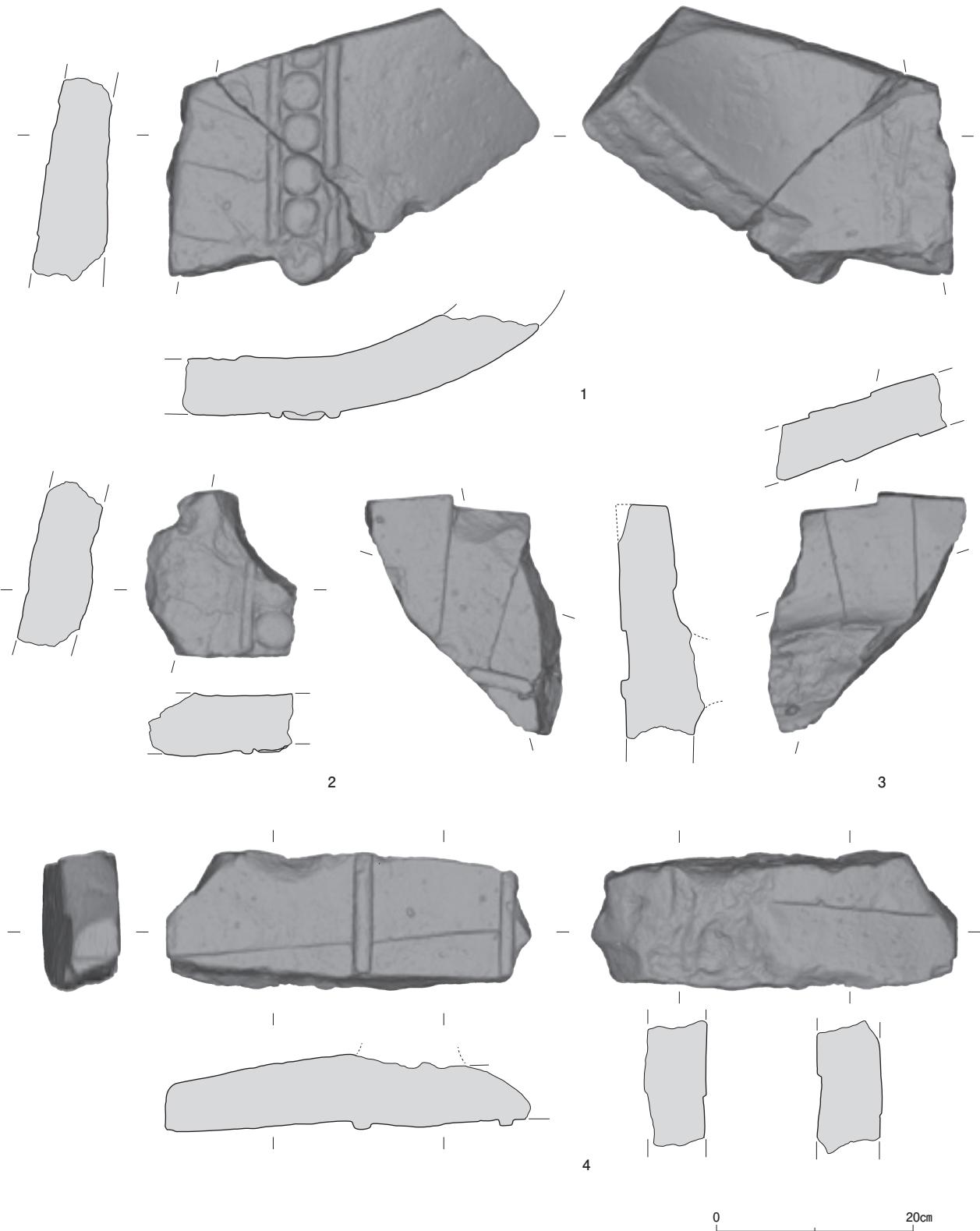


図22 天神山瓦窯周辺採集の鷺尾片 1:6

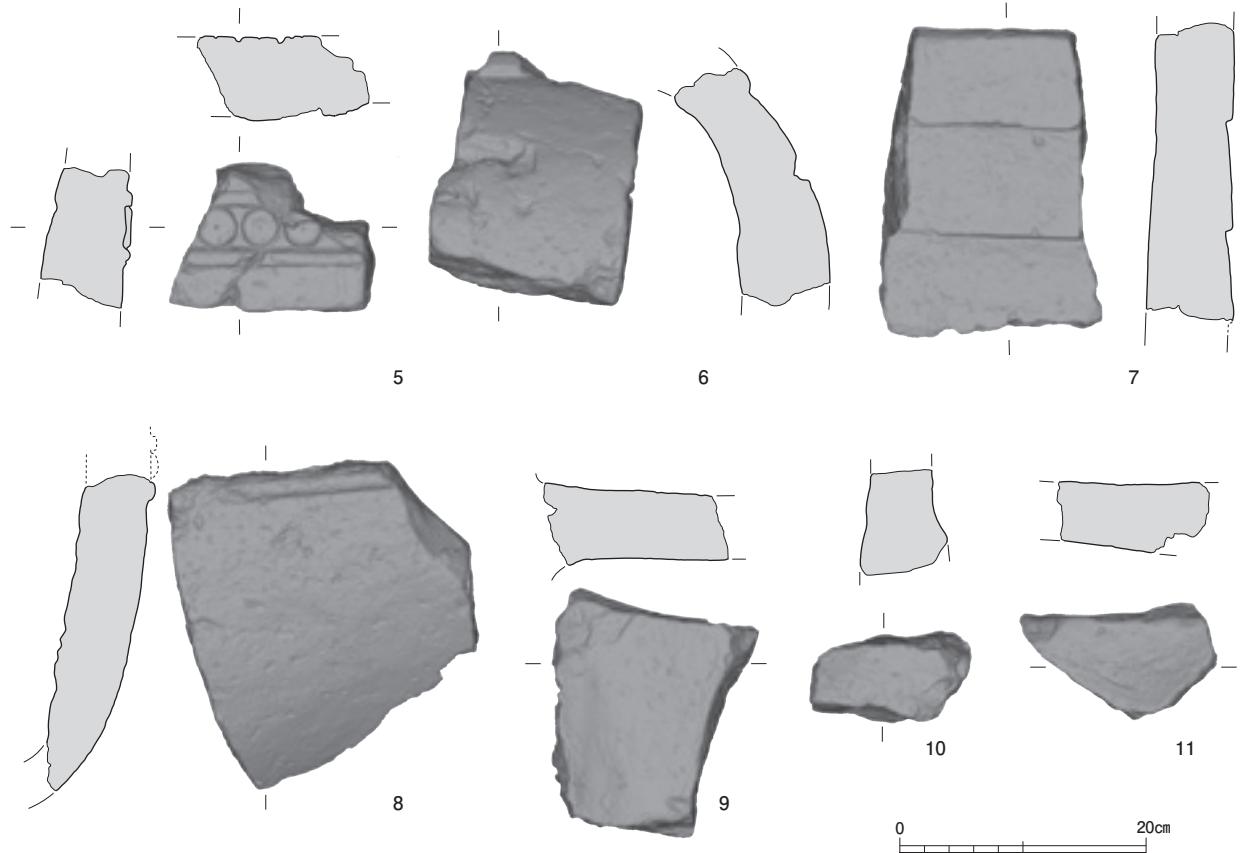


図23 天神山瓦窯周辺採集の鷲尾片 1:6

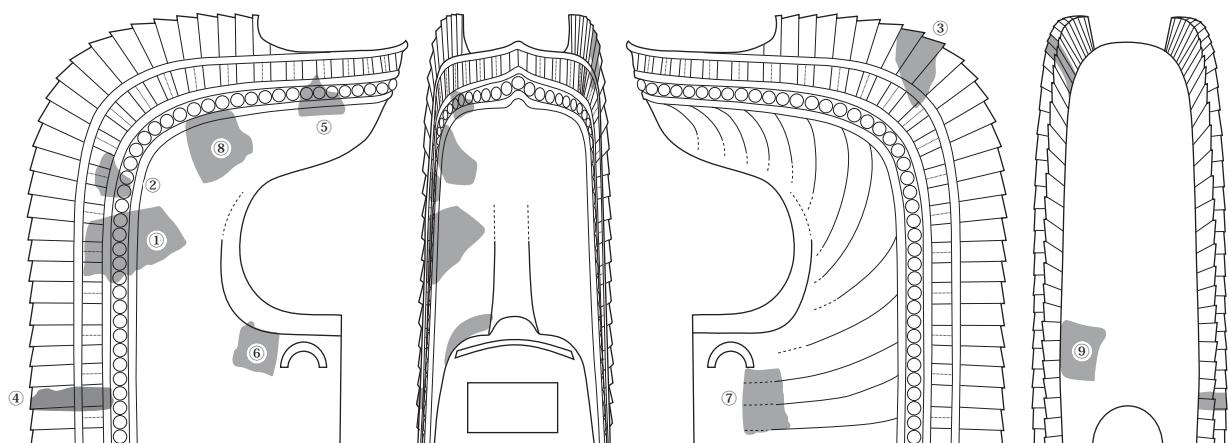


図24 天神山瓦窯鷲尾復元図（道上作成）

註

- 1) 後述の通り、奥山廃寺供給窯と本報告の鷲尾出土窯とは別の窯と考えられるため、便宜上、上方窯・下方窯と呼び分けることとする。これは窪田氏の提起によるものである。
- 2) 近江昌司「五条市天神山瓦窯の遺跡と遺物」『國學院雑誌』78-9、59-70頁、1977。上原真人「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』42、1-63頁、2003。
- 3) 檀考研鷲尾については、大脇潔『日本古代の鷲尾』奈良

国立文化財研究所飛鳥資料館、1980および廣岡孝信氏（奈良県立橿原考古学研究所）の観察所見に基づく。

- 4) 前掲3文献。
- 5) 道上祥武・廣岡孝信・清野孝之・白石純「奈良県の鷲尾」『古代瓦研究会第20回シンポジウム 鷲尾・鬼瓦の展開 I - 鷲尾 - 発表要旨』奈文研、1-30頁、2020。
- 6) 前掲3文献。
- 7) 前掲3文献および東京国立博物館『瓦塔・鷲尾』2002。
- 8) 前掲7文献。